



# お経のことば



## ロクハラミツ 六波羅蜜の解説 その1

### フセハラミツ 布施波羅蜜

今までこのコーナーでは様々な経典から短く一文を抜き取ってそのお経のエッセンスを掘り下げてきましたが、この度少し趣向を変え、いわゆる『仏教学』としてまとめられている実践的な教えの中身について六波羅蜜を取り上げ、今回から4回に亘って解説していきます。

まず、六波羅蜜とは六つの波羅蜜ということで、波羅蜜はパーラミター（完成された状態）の音写です。少し言い換えると『六つの完成されるべきもの』とも呼べます。

そして大乘仏教に於いて、「菩薩道の要諦とは何ぞや!？」と問われる時、それは六波羅蜜を己の身体に依って行じることであると即答できます。上にあげた布施波羅蜜とはその実践の第一歩に置かれ、易行であれ難行であれとても重視されていると同時に奥の深いものであります。

『布施』という言葉は現代の世間一般では主に檀信徒から寺側が頂く現金の意味で使われていますが、元を辿れば原始仏教の時代にその字の如く僧侶の袈裟（この頃はそれが唯一身に着ける着物）用としての布を施していたことに由来しています。

ここからが大事なのですが、仏教学に於いて『布施』という言葉は広く『施し』の意味で解釈されており、『施し』はサンスクリット語で『ダンナー』と呼び、日本ではご主人の事を指す俗語の檀那（旦那）さんとして、つまり家庭に施しを与えてくれる人という意味で使われています。

もっと言うと、サンスクリット語はインド・ヨーロッパ語族という括りでヨーロッパを代表する言語であるラテン語とも仲間であり、『ダンナー』は『ドナー』（献体）として医学用語に現在でも使われており、また英語では『ドネーション』（寄付）としても派生しています。

そんな訳で、日常生活と仏教用語が実は意外なところで繋がっているのですが、この『施し』という六波羅蜜の第一歩は正に日常生活に於いて実践されるべきものなのです。

ここでは実践＝修行という意味で話を進めていますが、現代でも修行と聞くと何やら人里離れた深山幽谷を思い浮かべたりします。しかし出家至上主義への反動という意味も込められた大乘仏教の流れの中では、むしろ世間の日常のど真ん中に於いての実践、つまり人と人との関わりあう中での施しの修行が重視されます。

財施（物質による施し）、法施（仏法の教えによる施し）、無畏施（恐れや不安を無くし、安心を与える施し）の3つが特に知られているのですが、財施にしても法施にしても何か物や知識を持っている必要がありますが、無畏施はそれらが無くても気持ちさえあれば誰でもすぐに実践することができるのです。

無畏施にはいろんな実践が考えられますが、その中で私が特にお奨めするのは『和顔施』です。和顔、その名の通り和やかな顔を施す事、つまり人に笑顔で接することです。

ともすれば我々は日常何か楽しいことが起きた時や、気分が嬉しいから笑うのだと思いがちではないでしょうか？ でも敢えて、「笑うから楽しいのだ!」と、発想を逆転してみるのはいかがでしょうか？

そして施しの相手は、出来る限り身近な人から。少しずつ笑顔の灯りを増やしていきましょう!

## 😊 楽しい行事案内 😊

- 9月23日（日）午後3時 彼岸会・千体流し
- 9月16日（日）午後2時 仏教勉強会(6回目)
- 毎月28日の9時と3時は護摩を焚いています。お気軽にお越しください。★葬儀の場合や止むを得ず中止有り

本山修験宗 大瀧山護国寺  
781-2155  
高知県高岡郡日高村九頭291  
☎ 0889-24-7244  
ホームページ👉 [gokokuji.site](http://gokokuji.site)  
いつでも、なんでも、お気軽にお電話ください。